

Effects of Contact Experiences on Attitudes toward the Mentally Disordered

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37551

研究報告

精神障害者への態度に及ぼす接触体験の効果

北岡（東口）和代

【要旨】精神障害者に対する態度を自分と精神障害者との社会的距離，精神障害者に対するイメージや感情・評価という二つの概念から測定し，精神障害者との接触の程度が与える影響について検討した。接触の程度は社会的距離とイメージや感情・評価の両者に影響していた。精神障害者との接触がほとんどない一般住民より，接触がある民生委員・ボランティアや医療関係者のほうが肯定的なイメージや感情・評価を持っていた。また，このイメージや感情・評価には性との交互作用が認められ，女性は男性と比べて接触の効果を受けにくいと言えた。一般住民と比べて，民生委員・ボランティアの社会的距離は小さく，受容的な態度を持っていた。しかし，精神障害者と日常的に接触をしている医療関係者の社会的距離は一般住民と同じように大きかった。以上の結果から，接触の増大が直線的に精神障害者への態度に反映するものではないと考えられた。

精リハ誌，5 (2) ; 142-147, 2001

精神障害とリハビリテーション

第5巻第2号 (通巻第10号)

研究報告

精神障害者への態度に及ぼす接触体験の効果

北岡（東口）和代

〔要旨〕精神障害者に対する態度を自分と精神障害者との社会的距離、精神障害者に対するイメージや感情・評価という二つの概念から測定し、精神障害者との接触の程度が与える影響について検討した。接触の程度は社会的距離とイメージや感情・評価の両者に影響していた。精神障害者との接触がほとんどない一般住民より、接触がある民生委員・ボランティアや医療関係者のほうが肯定的なイメージや感情・評価を持っていた。また、このイメージや感情・評価には性と交互作用が認められ、女性は男性と比べて接触の効果を受けにくいと言えた。一般住民と比べて、民生委員・ボランティアの社会的距離は小さく、受容的な態度を持っていた。しかし、精神障害者と日常的に接触をしている医療関係者の社会的距離は一般住民と同じように大きかった。以上の結果から、接触の増大が直線的に精神障害者への態度に反映するものではないと考えられた。

精リハ誌, 5 (2); 142-147, 2001



word

索引用語：精神障害者に対する態度，接触体験，一般住民，ボランティア，医療関係者

Key Words : attitudes toward the mentally disordered, contact experience, general public, volunteer, hospital staff

I 目的

精神障害者との接触体験は態度変容の可能性の点で重要視されている要因である³¹⁾。しかし、接触体験が多い者ほど受容的で好意的態度であったという報告^{4, 10, 16, 24, 30)}，逆に拒否的であったという報告^{25, 26)}，知識は増したがその態度は不変であったという報告^{9, 18)}がなされており，接触体験の影響については十分に明らかにされていない。さらに多くの知見が蓄積され，論議されていくことが望まれる。

石川県南加賀保健所では精神保健福祉に関する

意識調査を行なった¹⁹⁾。この調査では一般住民，高校生，民生委員・メンタルヘルスボランティア（以下，民生委員・ボランティアと略す），精神医療関係者（以下，医療関係者と略す）を対象に精神障害者に対する態度を測定した。これらの対象者を精神障害者との接触という視点から，一般住民と高校生は接触がほとんどないグループ，医療関係者は日常的に接触をしているグループ，民生委員・ボランティアは不定期な接触があり，その中間に位置するグループと考えた。これら三つのグループから，接触の程度が精神障害者に対する態度に与える影響を検討することが本研究の目的である。これまでの研究から，性や年齢が精神障害者への態度に影響を及ぼしていると考えられる^{2, 13, 14, 21, 22, 29)}。本研究ではこれら二つの要因も考慮して分析を行なった。

II 方法

調査の対象，対象の抽出方法，調査方法を以下に述べる。一般住民700人，高校生315人，民生

2001年5月22日受理

Effects of Contact Experiences on Attitudes toward the Mentally Disordered

石川県立看護大学看護学部看護学科／金沢医科大学公衆衛生学教室，Kazuyo Kitaoka-Higashiguchi : Department of Nursing, Faculty of Nursing, Ishikawa Prefectural Nursing University / Department of Public Health, Kanazawa Medical University

表1 調査対象者の基本属性

	全 体 N=783	一般住民 N=419	民生委員・ ボランティア N=194	医療関係者 N=170
性 男	315(40.2)	168(40.1)	94(48.5)	53(31.2)
女	468(59.8)	251(59.9)	100(51.5)	117(68.8)
年齢 10代	295(37.7)	289(69.0)		6(3.5)
20	68(8.7)	20(4.8)		48(28.2)
30	67(8.6)	25(6.0)	4(2.1)	38(22.4)
40	73(9.3)	20(4.8)	14(7.2)	39(22.9)
50	95(12.1)	18(4.3)	51(26.3)	26(15.3)
60	145(18.5)	29(6.9)	106(54.6)	10(5.9)
70	40(5.1)	18(4.3)	19(9.8)	3(1.8)

委員・ボランティア329人、医療関係者236人、合計1,580人が対象であった。一般住民は住民台帳から15歳以上の各年代ごとに無作為に抽出した者を対象とし、郵送法により調査を実施した。高校生は管内の一公立高校の1,2年生全員を対象とし、教室内で調査を実施した。民生委員は管内にいる者全員、ボランティアは管内の四つのボランティア・グループに登録している者全員を対象とし、各関係機関や所属グループに留め置いて調査を実施した。医療関係者は保健所管内の三つの精神病院と一つの総合病院の精神科病棟に勤務する職員を対象とし、病院ごとに留め置き調査を実施した。調査はすべて1997年8月に実施した。

調査票の回収数は一般住民が181票(回収率=25.9%)、高校生が300票(95.2%)、民生委員・ボランティアが260票(79.0%)、医療関係者が219票(92.8%)、合計960票(60.8%)であった。有効回答数は一般住民が148票(有効回答率=81.8%)、高校生が271票(90.3%)、民生委員・ボランティアが194票(74.6%)、医療関係者が170票(77.6%)、合計783票(81.6%)であった。対象者の基本属性を表に示した。高校生は一般住民に含めた。全体では男性が315名(40.2%)、女性が468名(59.8%)であった。一般住民群では男性が168名(40.1%)、女性が251名(59.9%)であった。民生委員・ボランティア群では男性が94名(48.5%)、女性が100名(51.5%)であった。医療関係者群では男性が53名(31.2%)、女性が117名(68.8%)であった。各群の年齢構成には特徴が見られた。一般住民には高校生が含ま

付録『精神障害に対する態度 (Attitudes toward Mental Disorder : AMD)』測定尺度質問項目

「自分と精神障害者との社会的距離に対する態度」因子

- 1) 見合い話があった場合、してみてもよい。
- 6) 隣りに住んでもかまわない。
- 9) 恋愛することもあるかもしれない。
- 10) 従業員として雇ってもかまわない。
- 11) 結婚することもあるかもしれない。
- 12) 友達になってもよい。
- 13) 一緒に働いてもかまわない。
- 14) 普通に近所づきあいは続けたい。
- 18) 精神障害者のための施設が、自分の住む地域につくられてもかまわない。
- 20) その仕事をするのができ、給与が妥当ならば、精神病院で働いてもかまわない。

「精神障害者に対するイメージと感情・評価」因子

- 2) 何をするかわからないのでこわい。
- 3) 善悪の判断がつけられない。
- 4) 暴れたり、興奮している人が多い。
- 5) 犯罪を犯しやすい。
- 7) 何をするかわからないので危険である。
- 8) 突然理由もなく、わめき散らすことがある。
- 15) 行動が理解できないことが多い。
- 16) できるだけ人里離れたところに精神病院を建て、隔離収容されるべきである。
- 17) 突然理由もなく、人に乱暴したり、傷つけたりすることがある。
- 19) だいたいぶそうに見えても、いつ何をするかわからない。

れているため、10代の者が多かった。民生委員・ボランティアは40~70代の者がほとんどで、10,20代の者はいなかった。医療関係者には各年代の者がいた。

精神障害者に対する態度の測定には著者らが作成した『精神障害に対する態度 (Attitudes toward Mental Disorder : AMD) 測定尺度』¹²⁾の一部(付録)を使用した。この尺度の概略を述べる。著者らは先行研究において、精神障害者に対する態度を測定する既存の評定尺度^{1,3,8)}には心理測定学的特性に疑問の残るものがあること、質問内容がわかりにくく回答しにくいものがあること、精神障害(者)に対する否定的表現で質問する項目が多いことに着目し、これらの問題点を解決するために新たな評定尺度を作成した。質問項目は主に既存の尺度や調査票^{3,5,11,17,20,27)}から収集したが、精神科医、心理学者、精神保健福祉専門家、精神科看護婦長、精神障害者家族、一般人らの助言を得て整理改変し、最終的に100項目とした。これらを主因子法、varimax回転で因子分

析することにより因子抽出と項目の選定を行なった。その結果、因子1：自分と精神障害者との社会的距離に対する態度（10項目）、因子2：精神障害者に対するイメージと感情・評価（10項目）、因子3：精神障害の原因に対する考え方（2項目）、因子4：精神障害の治癒に対する考え方（2項目）の四つの因子、24の質問項目から構成されるAMD測定尺度を作成した。しかし、今回、2項目しか属さない因子3と因子4を尺度構成の因子とすることは尺度の信頼性を低くし、標本が変わった場合に信頼性が大きく変わる不安定な挙動をする可能性があること、またScree testに基づいて検討すると因子2から因子3への固有値の減衰に急激な落ち込みがあることから、AMD測定尺度を4因子構造の尺度と考えることに疑問が投げられた。そのため、調査には因子1：自分と精神障害者との社会的距離に対する態度（以下、社会的距離と略す）と因子2：精神障害者に対するイメージと感情・評価（以下、イメージと略す）に属す20の質問を用いた。各質問に対して「そう思わない」「あまりそう思わない」「まあそう思う」「そう思う」の4段階評定で回答を求めた。「社会的距離」因子に属す「見合い話があった場合、してみてもよい」「隣りに住んでもかまわない」「恋愛することもあるかもしれない」など肯定的な内容の質問に対する回答には「そう思わない」=3点、「あまりそう思わない」=2点、「まあそう思う」=1点、「そう思う」=0点を付与し、「イメージ」因子に属す「何をやるかわからないので怖い」「善悪の判断がつけられない」「暴れたり、興奮している人が多い」など否定的な内容の質問に対する回答には逆の得点を付与して得点化した。各質問項目の点数を加算し、これを項目数で割った値を尺度得点とした。したがって、「社会的距離」尺度得点が高いほど精神障害者に対する社会的距離が大きく、「イメージ」尺度得点が高いほど否定的なイメージや感情・評価を持っているとみなすことができる。

次に、本研究で実施した解析方法について述べる。まず、得られたデータの信頼性について検討するために主因子法、varimax回転による因子分析を行ない、各因子の信頼性係数（Cronbachの

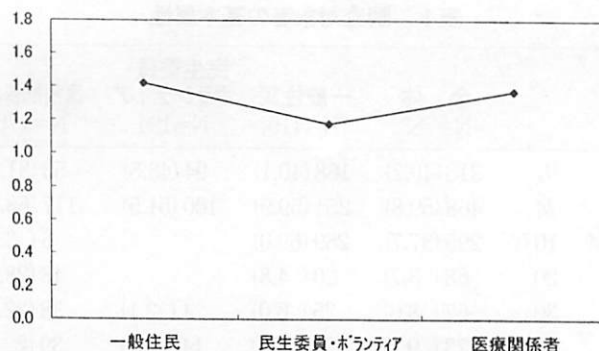


図1 各群の「社会的距離」尺度推定平均値

α 係数) を算出した。本研究の目的のためには「社会的距離」あるいは「イメージ」尺度得点を従属変数とした、性、年齢、精神障害者との接触の程度の3要因による分散分析がもっとも適当と思われた。しかし、民生委員・ボランティア群には10、20代の者がおらず、この分析は実施できなかった。そのため、年齢を共変数とした2要因の共分散分析(Tukey法による多重比較)を行なった。

Ⅲ 結 果

1. データの信頼性について

因子分析の結果、固有値の減衰状況と2因子の累積寄与率が36%と比較的高いことから、2因子解が妥当と判断した。「社会的距離」因子と「イメージ」因子に属する質問項目は原版尺度と一致していた。各質問項目の因子負荷量は項目16が.32とやや不十分な値であったが、その他の項目は.40以上を有していた。「社会的距離」因子のCronbachの α 係数は.83、「イメージ」因子のそれは.84であった。以上のことから、両因子ともに良好な信頼性があると考えた。

2. 「社会的距離」尺度得点について

「社会的距離」尺度得点を従属変数とし、年齢を共変数とした性(男性vs女性)×精神障害者との接触の程度(一般住民vs民生委員・ボランティアvs医療関係者)の2要因の共分散分析を実施した。共変数である年齢のF値(1,776)は10.95で有意($p<.01$)となり、接触の程度の主効果($F(2,776)=3.66, p<.05$)が有意であった。性の主効果は有意でなかった。性と接触の程度の交互作用も有意でなかった。すなわち、図1に示した「社会的距離」尺度推定平均値からわかるよ

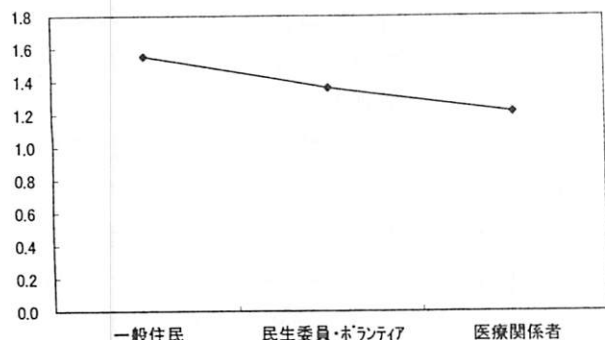


図2 各群の「イメージ」尺度推定平均値

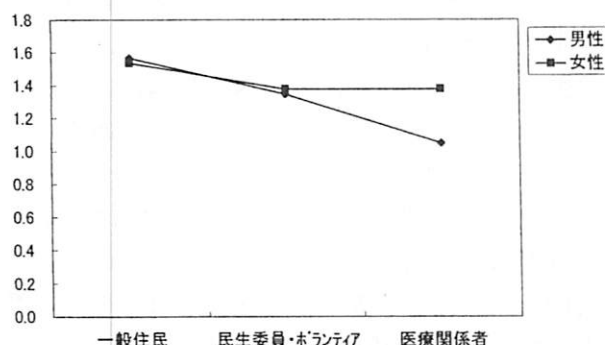


図3 各群の「イメージ」尺度推定平均値 (性別)

うに、一般住民群や医療関係者群が高く、民生委員・ボランティア群が低かった。Tukey法による検定では、一般住民群と医療関係者群との間には有意な差はなく、その他の組み合わせには有意な差があった。このことから、性別に関係なく、民生委員・ボランティア群が一般住民群や医療関係者群と比べて有意に「社会的距離」尺度得点が低いと言えた。

3. 「イメージ」尺度得点について

「イメージ」尺度得点を従属変数とし、年齢を共変数とした性(男性vs女性)×精神障害者との接触の程度(一般住民vs民生委員・ボランティアvs医療関係者)の2要因の共分散分析を実施した。共変数である年齢のF値(1,776)は29.58で有意($p<.001$)となり、接触の程度の主効果が有意であった($F(2,776) = 10.52, p<.001$)。性の主効果は有意でなかったが、性と接触の程度の交互作用は有意であった($F(2,776) = 3.28, p<.05$)。すなわち、図2に示した「イメージ」尺度推定平均値からわかるように、接触があるほどイメージ尺度得点は低かった。Tukey法による検定では、民生委員・ボランティア群と医療関係者群との間には有意な差はなく、

その他の組み合わせには有意な差があった。このことから、一般住民群が民生委員・ボランティア群や医療関係者群と比べて有意に「イメージ」尺度得点が高いと言えた。また、性により接触の程度の効果が異なることがわかった。男性では接触程度が上がるにしたがってイメージ尺度得点は一次的に減少しているが、女性では接触程度がもっとも高い人でもそれほどイメージ尺度得点が下がらなかったと言えた(図3)。

IV 考 察

精神障害者に対する態度を自分と精神障害者との社会的距離、精神障害者に対するイメージや感情・評価という二つの概念から測定し、精神障害者との接触の程度が与える影響について検討した。その結果、接触の程度という要因は精神障害者に対する社会的距離とイメージや感情・評価の両者に影響していた。接触があるほど、精神障害者に対するイメージや感情・評価は肯定的であった。つまり、精神障害者との接触がほとんどない一般住民より接触がある民生委員・ボランティアのほうが、民生委員・ボランティアよりさらに接触がある医療関係者のほうが肯定的なイメージや感情・評価を持っており、民生委員・ボランティア、医療関係者と一般住民の間には違いが認められた。また、一般住民の社会的距離は大きく、民生委員・ボランティアの社会的距離は小さく、両者の間には違いが認められた。しかし、精神障害者と日常的に接触をしている医療関係者の社会的距離は一般住民と同じように大きかったことが注目された。

Truteら³⁰⁾は、身近な人が精神障害者である、精神病院に入院している人を見舞いに行ったことがあるなどの体験をしている一般住民ほど精神障害者に対する受け入れがよく、肯定的な見方をしていたと報告している。Crismonら⁴⁾もそのような接触体験がある大学生はない大学生より社会的距離が小さく、より好意的な態度を持っていたと報告している。本邦においても、大島ら²⁴⁾は地域にある精神病院の患者との接触体験を持っていたり、身近な精神障害体験者との接触を持っているほど社会的距離が縮小すると述べている。ま

た、対象者を全国的に無作為抽出して行なった全国精神障害者家族会連合会の調査³²⁾では、精神障害者に関するイメージや見方を肯定的にする要因として、接触体験やボランティア経験を挙げている。AMD測定尺度を用い、精神科臨床実習を行なった医学生が精神障害者に対する態度の変容を検討した著者らの研究¹⁵⁾では、医学生の実習後の「イメージ」と「社会的距離」尺度得点はともに有意に低くなっており、精神障害者との実際の接触が効果的であったことが示唆されている。

これらの結果と同様に、本研究においても民生委員やボランティアとして精神障害者と接触することで肯定的なイメージや感情・評価を持ち、社会的距離は小さくなり受容的な態度を持つと考えられた。しかし、清水²⁸⁾が指摘しているように、接触の増大が直線的に精神障害者への態度に反映するものではないと考える。本研究では、医療関係者と民生委員・ボランティアとの間にイメージや感情・評価の違いがあるとは言えなかった。また精神障害者と日常的に接触をしている医療関係者の社会的距離は民生委員・ボランティアより大きく、むしろ一般住民が感じている社会的距離に近いと言えた。Page²⁵⁾は精神病院勤務者は一般住民より拒否的であったと報告し、大井²³⁾も接触が多い医療関係者は「あまりにもその実態を見せつけられ」困難な客観的現実を知り、ステレオタイプからくるものとは異なるにせよ、やはり非受容的な態度を形成しやすいことを示唆している。医療関係者という集団には接触が増えていく中で、肯定的方向にも否定的方向にも作用する質的な接触要因が交絡してくると思われる。この研究領域においては、接触の質という側面からの検討が今後必要と考える。

男女の別により精神障害者に対する態度に違いはないという報告^{2, 6, 7)}もあるが、違いはあるという報告^{13, 14, 21, 29)}が多い。本研究では、性の要因が精神障害者に対するイメージや感情・評価および社会的距離に及ぼす影響も併せて検討した。精神病院勤務者を対象とした星越ら¹⁴⁾は男性職員のほうが社会的距離が小さく、好意的態度であったと述べているが、本研究では社会的距離への性による影響は認められなかった。他方、イメー

ジや感情・評価に関しては接触の程度との交互作用が認められ、接触の効果は性別により異なると言えた。男性では接触が増えるにしたがってイメージや感情・評価も肯定的となるが、女性については接触が多い人でもそれほど肯定的となっていないと言えた。つまり、女性の医療関係者は男性の医療関係者と比べると接触の程度という要因からの影響を受けにくいと解釈できた。しかし、医療関係者の性差について述べるには慎重でなければならない。繰り返しになるが医療関係者集団にはさまざまな要因が絡んでいると思われ、性という要因の差であるのか、その他の要因による差であるかは今後さらに検討していく必要がある。

今回、AMD測定尺度を4因子構造を持つ尺度と考えることに疑問が投げられ、調査では因子1(社会的距離)と因子2(イメージ)に属する20の質問を用いた。しかし、本研究ではこの短縮版AMD測定尺度の構成概念妥当性などについての検討はしていない。AMD測定尺度が短縮版として適用可能かどうかの検討が今後の課題として残る。

謝辞：解析にあたって統計学的に貴重な助言を下された名古屋市立大学鋤柄増根教授に深謝いたします。

付記：本研究は平成9年度厚生科学研究費補助金(保健医療福祉地域総合調査研究事業)による地域精神保健福祉と住民参加に関する研究(水腰久美子代表)の一環として行なわれた精神保健福祉に関する意識調査からのデータによるものである。

文 献

- 1) Baker F, Schulberg HC: The development of a community mental health ideology scale. *Community Mental Health Journal*, 3; 216-225, 1967.
- 2) Brockman J, D'Arcy C: Correlates of attitudinal social distance toward the mentally ill: A review and re-survey. *Social Psychiatry*, 13; 69-77, 1978.
- 3) Cohen J, Struening EL: Opinions about mental illness in the personnel of two large mental hospitals. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64; 349-369, 1962.
- 4) Crismon ML, Jermain DM, Torian SJ: Attitudes of pharmacy students toward mental illness. *American Journal of Hospital Pharmacy*, 47; 1369-1373, 1990.
- 5) Crocetti GM, Spiro HR, Siassi I: Contemporary Attitude towards Mental Illness. University of

- Pittsburgh Press, 1974. (加藤正明監訳：偏見・スティグマ・精神病. 星和書店, 1978)
- 6) Eker D : Effect of type of cause on attitudes toward mental illness and relationships between the attitudes. *The International Journal of Social Psychiatry*, 31 ; 243-251, 1985.
 - 7) Fryer JH, Cohen L : Effects of labeling patients "Psychiatric" or "Medical" : Favorability of traits ascribed by hospital staff. *Psychological Report*, 62 ; 779-793, 1988.
 - 8) Gilbert DC, Levinson DJ : Ideology, personality and institutional policy in the mental hospital. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 53 ; 263-271, 1956.
 - 9) Godschalx SM : Effect of a mental health educational program upon police officers. *Research in Nursing and Health*, 7 ; 111-117, 1984.
 - 10) Gutierrez JLA, Ruiz JS : A comparative study of the psychiatric nurses' attitudes towards mental patients. *The International Journal of Social Psychiatry*, 24 ; 47-52, 1978.
 - 11) 端章恵, 谷直介 : 精神障害に対する看護学生の意識：一般女子学生との比較. *こころの健康*, 1 ; 72-79, 1986.
 - 12) 東口和代, 森河裕子, 中川秀昭 : 精神障害(者)に対する態度についての測定尺度の作成：信頼性と妥当性の検討. *こころと社会*, 28(3) ; 110-118, 1997.
 - 13) 東口和代, 森河裕子, 三浦克之, 他 : 接触体験が精神障害(者)への態度の変容におよぼす効果：医学生における臨床実習の場合. *コミュニティ心理学研究*, 1 ; 173-186, 1997.
 - 14) 星越活彦, 洲脇寛, 實成文彦 : 精神病院勤務者の精神障害者に対する社会的態度調査：香川県下の単科精神病院勤務者を対象として. *日本社会精神医学会雑誌*, 2 ; 93-103, 1994.
 - 15) 北岡(東口)和代, 森河裕子, 三浦克之, 他 : 接触体験が精神障害者への態度の変容におよぼす効果(Ⅱ) : AMD尺度適用等による医学生臨床実習効果の再検討. *コミュニティ心理学研究*, 4 ; 144-155, 2001.
 - 16) Link BG, Cullen FT : Contact with the mentally ill and perceptions of how dangerous they are. *Journal of Health and Social Behavior*, 27 ; 289-303, 1986.
 - 17) 町沢静夫, 佐藤寛之, 沢村幸 : 精神障害者に対する態度測定：患者群, 患者家族群, 一般群の比較. *臨床精神医学*, 19 ; 511-520, 1990.
 - 18) Malla A, Shaw T : Attitudes towards mental illness : The influence of education and experience. *The International Journal of Social Psychiatry*, 33 ; 33-41, 1987.
 - 19) 水腰久美子代表 : 地域精神保健福祉と住民参加に関する研究：精神保健福祉に関する意識調査(第1部). 平成9年度厚生科学研究費補助金(保健医療福祉地域総合調査研究事業)報告書, 1998.
 - 20) 野田和雄 : 精神衛生に関する意見・態度：昭和43年・48年の調査と昭和60・61・62年の看護学生への調査の比較について. *静岡精神衛生センター所報*, 18 ; 59-66, 1988.
 - 21) Norman RMG, Malla AK : Adolescents' attitudes towards mental illness : Relationship between components and sex difference. *Social Psychiatry*, 18 ; 45-50, 1983.
 - 22) Ojanen M : Attitudes towards mental patients. *The International Journal of Social Psychiatry*, 38 ; 120-130, 1992.
 - 23) 大井春策 : 精神障害に関する臨床社会学研究：社会の受容度を中心に. *関東短大紀要*, 16 ; 101-111, 1970.
 - 24) 大島巖, 山崎喜比古, 中村佐織, 他 : 日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観：開放的な処遇をする一精神病院の周辺住民調査から. *社会精神医学*, 12 ; 286-297, 1989.
 - 25) Page S : Social responsiveness toward mental patients : The general public and others. *Canadian Journal of Psychiatry*, 25 ; 242-246, 1980.
 - 26) Pines A, Maslach C : Characteristics of staff burnout in mental health settings. *Hospital and Community Psychiatry*, 29 ; 233-237, 1978.
 - 27) 精神障害者福祉基盤研究会(岡上和雄代表), 全国精神障害者家族会連合会 : 精神障害者の社会復帰・福祉施策形成基盤に関する調査. 三菱財団社会福祉助成金報告書(ぜんかれん号外), pp.27-72, 1984.
 - 28) 清水新二 : 精神障害と社会的態度仮説の実証的研究：アルコール症の場合. *社会学評論*, 40 ; 31-45, 1989.
 - 29) Taylor SM, Dear MJ : Scaling community attitudes toward the mentally ill. *Schizophrenia Bulletin*, 7 ; 225-240, 1981.
 - 30) Trute B, Loewen A : Public attitude toward the mentally ill as a function of prior personal experience. *Social Psychiatry*, 13 ; 79-84, 1978.
 - 31) 吉松和哉, 小泉典章 : 精神病と偏見をめぐる現代社会の病理. *精神医学*, 35 ; 342-348, 1993.
 - 32) 全国精神障害者家族会連合会 : 精神障害者観の現況'97 : 全国無作為サンプル2000人の調査から. ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ, 22 ; 49-53, 1998.